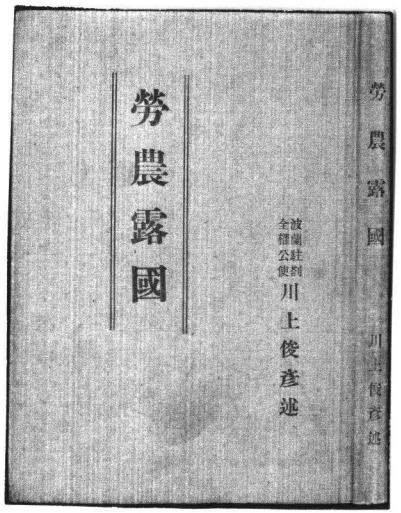
川上俊彦（かはかみとしつねこ）　外交官、實業家。文久元年十二月二十九日越後國岩船郡村上本町生れ、昭和十年九月十二日歿（一八六一―一九三五）。村上藩家老職の子。明治十七年東京外國語學校露語卒。外務省に入り、釜山領事館、サンフランシスコ領事館、ペテルブルグ公使館の書記生を經て、二十三年ウラジオストク駐在貿易事務官となった。日露戰爭時には居留民引揚げ等に從事した他、滿洲派遣軍司令部附として、乃木希典、ステッセル兩將軍水師營會見時の通譯を務めた。四十二年ハルビン總領事の時、伊藤博文遭難事件が起り自身も負傷。四十五年モスクワ總領事、翌年官を辭して南滿洲鐵道株式會社（滿鐵）理事となる。

大正六年、二月革命後のロシア各地を巡り有力者達と會見して「露國視察報告書」を作成、（木野（一郎）外相のシベリア出兵強硬論の有力な資料となった）（物地（昌典））。のち特命全權公使としてポーランドに駐箚、歸朝の際その人生涯の大半を送った深い馴染の國ソロシアを通過、革命後の樣子を詳さに語った「人露記」を含む『勞農露國』（再版・大正十二年五月十五日大阪毎日新聞社・東京日日新聞社）を出版した。その後は北樺太鑛業社長、日魯漁業社長等、實業界に過した。